

1961年（昭和36年）〔辰雄57歳〕

小池辰雄書簡（渡欧だより）（1）

（宛先） 武蔵野市吉祥寺 小池順子様

（ハンブルク・ウエリングスビュッテル）小池辰雄

——1961年4月30日——

羽田でのみんなの見送りがまだ目の前にちらつく。飛行機の18番のC（中側）の席だったが、窓のところへ来てみんなを見たけれども、ライトの関係でわからなかった。翼のつけねのところでは非常口のあるところだった。きいていたようにテューリストのせまい席。荷物は25キロだったが大目にみてくれた。交通公社の井出君におかげ様で荷物もパスしたことを自宅へ電話して礼を言つて下さい。お礼のものは送ったね。

すさまじい勢いでのぼっていった様だが、飛行機の中ではそれほどにも感じなかった。たちまち37000^{フット}呎という高高度に達したが、別に何ともない。きいていたように快適であった。狭いことだけが遺憾だけれども。月明かりの空、12時頃にお夜食、ながめるだけ。歌子にたべさせたい様なビフテキもそのまま！ 眠る如くさめる如くしている中に4、5時間、ブラインドをかけて機内は暗くされていた。明け方の5時（日本時間）に太陽はずっとたかく、アラスカは10時頃、上空から雪の針葉樹林、あんがい寒くない。朝食ものこす。1時間後に機内の人となり、ハンブルクへのみちにつく。機内の人となりは銀座の白馬車の取締まりの人、建築技師であった。気持のいい人たちでチョイチョイはなしをしながらゆく。本をよむ気はおきない。北極のわきをすぎ、グリーンランドの上空をゆく。サスより西よりを走るらしい。グリーンランドはまだ全くホワイトランドである。左手に太陽、右手に満月というすばらしい空！ はるか下に雲海、やがて機体がさがってゆくのを感ずる。ドイツが近い。雲海をつき破っていると、眼下に海岸線がみえる。エルベ川も。ぐんぐんおりにゆく。やがてまた雲、霧。どうなるかと思っていたら、もう真下にドイツの赤い屋根と緑の林や芝生！ 絵の様に美しい。日本の家屋と大分ケタがちがう。どんどんおりて実には手に取る様に見えて来た。その印象ははじめてだけに深い。自動車も人も見えてくる。やがて低空、面白い様にうつってゆく。と車輪が地面に接触。着陸だな！ となりの白馬車さんが

「先生、おめでとうございます。ハンブルクですね」

と挨拶。これでまず第一歩！ 飛行場のバスにのって、旅券検査場まで。トランクをうけとって、そこに出迎えに来ていたロッテ・パウルス夫人、レナーテ嬢、フォルカー（次男）の三人に迎えられて、アウトで自宅まで。東京とちがって人かげが少ないのでちよつと妙



な気持。緑が本当に美しい。ちりほこりがないからだ。このアウトは望月君のような上等ではないが、道がいいので無難。並木路のカスターニエンや桜や林檎が花さいている。パウルスさんの家はあのスライドより更に美しい。私の書斎（この室は二間半と三間のひろさ、ゆつたりしたもの。しきもの類はすべておばさんの作つたもの）。

安藤君のいった通り食べきれない。照雄たちなら大丈夫、ハムもでっかい一きれだ。野菜は東京の方がはるかに豊かである。コーヒーはおいしいが、紅茶はまあまあ。

この室の前はひろい芝生。今、娘さんがモーター芝かり機で刈っている（4月30日午前11時）。林檎が2本満開でとても美しい。白に淡い紅がまじっている。左手におばあさんの家。感じのいい、人のよいおばあさんだ。パウルス夫人も親切にしてくれる。

（4月30日、日付はおなじです）。日曜の朝はみんな一緒に朝食をたべた。聖書にサインをしてもらった。Frieda Stein（フリーダ・シュタイン）、Lotte Paulus（ロッテ・パウルス）、Tim（ティム）君、Renate（レナテ）嬢、Volker（ヴォルカー）君、Rüdiger（リュディガー）君。三人の男の子の性格もほづかめた。末っ子はやはり末っ子らしい。みんなしかし、それぞれ家のことも手伝っている。ロッテ夫人は戦後すぐ夫をなくなしてから独力でよくやって来た。夫は園庭技師であつた由。

昨日からロッテさんとは一番よく語つたが、私がドイツへ来たことがなくてよくそんなに語れるといつてほめられた。やつぱりしかし来てみると、言葉がいかに不自由であるかも内心は感ぜざるを得ない。彼らがはや口でベラベラ言っているのはどうもわからない。それがわかるには半年はかかるだろう。日本語も本よむときと会話とちがうように。彼らの会話では、言葉の発音が適当にながされている。それで、よめばわかる言葉も語れるとわからぬというわけだ。

洗面場の湯と水のきりかえは、マッチなしでうまく出来ている。将来はうちの洗面場もお勝手もあの様な機械がほしい。バスは未だとらない。大きな湯船である。うちのとほぼ同じくらいかな。以上が大体の様子。ベッドは心地よい。ハイツング（暖房）があるので、昨晩はあつくてねまきをぬいだ。

さて、あわてて来たので、もつてくるべきものを大分忘れた。何さますべては辞典がたつた。そのうち思いついたものを書くから、送ってもらいたい。本のこと（身のまわりのものも、もう少し考えた方がよかった。がそちらではケントーがつかないふしもあつたわけ）。どのみち、あれ以上は量的に無理だった。すでに超過していたのだから。まあよかったというよりしかたがない。

◎上田君に杉並区天沼の丹羽紀子さんのドイツ語の家庭教師をたのんでおいたから、連絡する様に。地図をこっちへもつて来てしまった。電話できいてたずねてくれるように。これは幕屋のほかの青年にはわからぬ様に上田君に伝えた方がよい。ゴタゴタしたくないから。



◎文部省総務班の増子事務官に旅券で、欧州諸国を廻れる様にとりはからってくれたことを電話で感謝して下さい。そして私宅をきいて5、6百円、1千円までのもののお礼をしておいて下さい（日本の切手と切符を封入）。

◎福生さんの家庭教師のことをきまりをつけずに来てしまったので、

第1候補、渋谷区代々木西原町の鶴田久雄方、藤崎正敏（福岡市出身、将来大学教授志望）。

第2候補、千代田区神田三崎町の松本豊彦（将来貿易商か教授志望）。

第3候補、吉祥寺の荒井邦寿（将来貿易商志望、父、武蔵高校校長）。

◎望月からの5千円の切手、白水社の1万数千円の為替、共にタンスの上の左の小さな引き出しにあり。忘れぬ様に現金にしなさい。

◎上田君にスピリの校正をたのむこと。原本は書斎の真ん中の本棚の上段にあり。

4月30日朝（今朝）は小鳥で目がさめた。10時には（日曜）教会の鐘がなるのがかすかにきこえた。朝は一番はやく目がさめた。10時にねたから8時間は眠った。全く別荘にきている気持。郊外でよかったと思っている。昨日、ハガキや切手を買いに夫人が自動車であつてくれた。勿論、彼女はいろいろ買物をした。日曜は買物ができないからである。日本もこうなるといいと思う。（ジェット機の音がしている）。

忘れた本は次の如し（思いつくまま）。

◎小英和辞典（研究社か岩波のもの。ただしひよつとしたら船便の中に入れたものもあるかも知れない）。

◎ドイツ語の小聖書（これはこちらで買う）。

◎内村鑑三『余はいかにしてキリスト者になりしか』（岩波文庫版）とその独訳の本。

◎親鸞の『歎異抄』の独和对訳の本。

◎朝日ジャーナルを朝日ジャーナル編集部川口信行君にすぐ航空便で送ってくれる様にたのんで下さい毎回。朝日新聞東京本社。学校ではなく、このパウルスさんのところへ。これは私の宛名をもつて信雄がぢかに行つてたのんでもらいたい。料金は送料とも一部100円位になるかと思う。

◎山本有三著『真実一路』の独訳と、日本語文庫版。この二つはそろえておいたからわかると思う。信雄にみてもらつて下さい。

◎藤井武『羔の婚姻』の選集版、岩岡書店から出したもの。

◎藤村の散文『千曲川のほとり』か何かうすいのを一冊。

◎内村鑑三の『一日一生』の文庫版。（以上を一括して小包で。宛名にProf.〔教授〕をおとさぬ様に。DRUCKSACH印刷物という文字を必ず入れるように）

あだちサンの住所をおしえて下さい。

サワは帰つて来たですか、解雇はすみしましたか。

◎集会の皆さんにこの手紙のうちのしつかり内容をしらせて下さい。よまなくてもいい



から。よんでもいい。適宜に。とてもあらためて書けないから。

○市川先生から20マルクのお餞別をいただいたからよろしく感謝申し上げて下さい。

○パウルス家の皆さんは親切である。お世辞はドイツ人は言わないが、私がキリスト者ときいておどろきました。昨夜、一夕やりましたよ。

——1961年5月5日——

今日は5月5日（今は午前11時）そちらの午後4時頃。どうもずれがピンと来ないです。パウルスおばさん（56才）1905年生が今、順子の手紙をもつて来てくれました。昨日は、私のこの書斎の左前に見える家にひとりずまいしている。この夫人のお母さん83才の誕生日で3マルクのプレゼント（お菓子）をしましたら、よろこんでいました。到着のときは紺色、桜の花のテーブルセンター贈りました。順子と同様、社会問題、政治問題に興味のあるファイトのあるおバアさんです。しかも、人柄はいかにもニコニコしていて気持がいい人です。リングの樹は相変わらず花咲き、鳥うたいで全くいい気分です。ドイツは芝生が多いです。清子が鼻を高くするでしょう。ゴミは全くたためといつていいですから、ワイシャツは汗をかかぬかぎりよごれません。ドイツの女の歩くことの速いのにあきれます。僕は日本で速い方ですが、こちらの若い女性にしばしばまけるほどです。5月1日に末つ子のリュディガー君と市内へ行つたときも（照雄と同じくらい）、スタコラ歩くので汗をかきました。家の人々とはなかよくやっています。その点、安藤君とはちよつと調子がちがう様に彼らは感じているようです。夕食はむしろ彼らと一緒に食べることが多いです。大いに談笑しています。昨晚なども、私がメンチボールの如きものにジャガイモにかける汁をかけて笑われたら、そのうちに何かのひょうしに、娘さんが同じまちがいをして大笑い、

「プロフェッサーに 影響された！」

などといつて。みんなは私のことを「ヘル・プロフェッサー！」とよんで決して名前はよびません。これがドイツの礼儀なのでしょう。子供たちは大体ネクタイを食事のときもつけています。こちらはスポーツウェアで失敬。すべてあまり気をつかわず、ノンキにやっていますから御安心下さい。そろそろ太つて来つつあるかも知れません。何さま分量が多いので、いつものこします。安藤君が言つた様にトアレットの音がちよつと聞こえるのと、ドアをドイツ人はガタンガタンと力強くしめるのがちよつと困ります。朝7時頃（少しまえから）子供たちの登校の頃、その音で眠りは破られます。もつともその前に小鳥のうたで。ステイムは5月から入りません。夜はちよつと冷えますが大丈夫。

さて、お手紙の内容に対してお応えしておきましょう。船荷のこと御苦勞様です。得男君か信雄が（或いは順子が）横浜まで行つてくれるわけですね。こちらの子供たちはよくお



母さんをたすけていますが、そちらでもお父さんが不在のときは自明的にそうなると思います。手紙類も衣類の中にさしはさんでおいて下さい。勿論、ドイツから返事は書きませんが。こちらでは順子へのたよりのほかは余り書けません。コストが生活費をおびやかしますから。なるべく本を買う方に重点をおきますから。たよりは航空便でなければ、マガヌケて書くわけにもゆきませんから。二神さんには、日本人の生活の一端を英文でタイプしたノートをもらいましたが、役に立つと思つています。よろしく言つて下さい。日本を立つ前にハガキで感謝状を書いたはずでしたが。辞典の原稿はこちらですすでに続行しています。充分時間があります。日本で買わなかったドイツ語の聖書（便利な註のついたもの）、辞典の作製のための本、地図も買いました。安藤君がインキやちりがみや封筒、シートの、石鹼等をのこしておいてくれて役にたっています。

白水社の為替は順子のいつも入れている（私の下着類タンスの）上の小さな左側の引き出しの中にたしかに入れたはずです。よく見て下さい。電話の料金は同じ引き出しか、茶の間の整理箱かどちらかで私の室ではなかったはずはです。

いずれ兄上にはおたよりしますが、今までに知ったこと、おついでのおりお伝え下さい。くれぐれも兄、姉によろしく。学校は昨日、主任のベンル、次のヴェンク両教授とあいましました。気持よく語りました。ドイツ語の会話もあんがい楽で、自分で不思議に思うくらいです。パウルスさんたちも初めてドイツに来て、よくそんなにしゃべれると言つてくれますから御安心。

信雄君、書齋にうつたらしく、大いにおちついて勉強をつづけて下さい。私の本も大体分類してありますが、貴君のつかいよいようにしてこの一年はつかって下さい。哲学の本もかなりあるはずはです。こちらでドラマを見にゆくのはもう少しおちついてから。ブレヒトの参考書のこと、買っておきましようから、贈られたときスラスラとよめるように内的準備をととのえておいて下さい。たのしいことです。ドイツ語の勉強のためには私の書齋にはありあまるほどの文法書も読本もその他もありますから、充分御活用を！

こちらの大学の研究室の日本語及び日本文学の文献のそろつているのにおどろきました。こちらの研究室の椅子に坐っていると俄然、日本文学の勉強をしたくなりました。楽しい一年です。

照雄君。白水社の原稿料の為替は封筒から出して、むき出しで前記のところに入れてあるはず。よくひっくりかえしてさがして下さい。みつかったら一割りかね……。白水社からスピリの原稿がきたら、先便でお母様に書いたと思うが、上田君に連絡して校正してもらう様に。上田君のはじめの原稿のノートはお座敷の（集会の室）つくりつけの棚の上段右手にあるはずはです。上田君自身にさがしてもらつて結構。貴君のこの一年の入試への御健闘を祈ります。楽しく勉強して下さい。こちらでは、子供たちは彼らに必要とするもののほかはテレビを見ません。そういうところはドイツ人は実に自覚がハッキリしています。



○朝日ジャーナルはとにかく送ってもらいます。そのうちにまたくわしいことは。

○宗教方面の講義は秋から。いずれまた、それらの本のことは。

○授業は月、木、金の午後ときまりましたが、初級と中級の会話が主です。上級ののはどうも一人くらいらしく、それが私と一人対一人で劇の翻訳をしたいらしいです。

○昨日は市の中心でアタカの会社の人、石山さんと井出さんをたずねました。市川先生からいただいたなにがしをマルクにかえてもらいました。本が買えます。

○教授たちのためとその一人の学生のために或いはもう一日出かけるようになるかも知れません。しかし、一時間の出勤は何でもありません。運動になっていいでしょう。

○バス(湯)は水曜ごとに一回入ることにしました。こちらの子供たちは土曜日に入ります。フロばかりは全く東京がこいしくなりますが、こちらにしているとそれほど入りたくもなくなるわけです。

○昨日はまた池上君の甥にもあいました。いろいろ市内を教えてもらいました。今日はこれから総領事へゆきます。こちらの寄留届は一昨日すみしました。パウルスさんにつれていつてもらって。とにかく5月6日までがはじめの一週間、大体のケンターがつかしました。

○万事好調ですから御安心下さい。

○おばあちゃんによろしく。

○近藤君には絵葉書類を5月2日にとどけました。ただし彼はドレスデンへ行っていて不在でした。あのオバサンによろしくおつたえ下さい。

歌子ちゃん。

市川の野間君好調のよし、うれしい。どうかよろしく。充分大切にするように。そのうちにこちらのエハガキを書きます。たのしみにして下さい。もう一年のガンバリだね。どうか貴女も無理をしないように。ねーやがないから、お母さんを助けてあげて下さい。お母さんのわきになるね。こっちの娘さんも貴女にちよつと似ている。ドイツの娘さんだつて、それは日本にちよつと見られない美人がいるさ……。見とれておちるドブもないから御安心！

ではこの辺で。はるかに皆さんのため祈っています。

○1961年4月28日（金）

朝から出発準備。書籍小包(5キログラム以内)3個をつくって小暮得男君に出してもらおう。出発準備の不備はすべてドイツ語固有名詞辞典作製のために生じた結果。辞典はハンブルクで続行の予定。望月君が自家用のくるまで羽田まで送ってくれる。自分と順子と歌子と照雄同乗。信雄は学校から電車とバスで。清子は得男君とアウトで。空港には荻窪の龍二兄上が旅すがたで見送って下さる。その他、山本保、隆、宏夫妻の親戚のほかは殆ど武蔵



野幕屋の兄弟姉妹。市川房枝先生のお見送りには恐縮、貴重なおせんべつを賜る。「神はやぐら」のルッターの讚美歌合唱をもつて見送られたことは何よりの力であった。ハレルヤである。最後のサヨナラ！をして午後10時、エア・フランスの機上の人となる。その前、徐君が手荷物をもつて助けてくれたのは忘れられない。翼のつけねのところの18番Cの座席におさまる。窓から見送人のさんばし（陸橋）をみたがライトの関係でわからない。しかしみんなの見送りを感謝しながら、その方向を見ていた。

10時半、爆音すさまじく動きだす。さらばみなさん、サヨナラ、日本よサラバ！という気持が胸の中にうめいていた。機体が滑走路までくるといよいよ本式のスタートである。ぐんぐん上昇するのが感ぜられた。多分機体のあかりが見えなくなるまでみんなは見送ってくれたであろう。やがて3万7千フィートの高高度であることを知らされる。機内は動揺きわめて少なく楽である。12時頃、夜食がでるが、ながめるばかり。食べられはしない。歌子にたべさせたいビフテキもそのまま。やがてブラインドがかかつて旅客は眠りにつくのであるが、眠るが如くうつつの如くである。日本時間で朝の5時頃、アンカレッジの時間で午前10時頃アンカレッジに到着。機上から雪の山々や針葉樹林がよく見えた。飛行場は休憩所で朝食、これも半分しか食べられない。一時間休憩の後、ハンブルクへの路につく。

左手に太陽がキラキラと輝き、右手に満月が浮かんでいる。高高度、下には雲海、陽と月と、西洋と東洋との融合を黙示するが如き景観。しばし瞑目してわが旅の目的の成就を心に祈る。北極のやや西側を通ってグリーンランドの上空にさしかかる。グリーンランドはホワイランドである。しばらくしてドイツ北岸にさしかかる。地図を見るように湾岸線とエルベ河らしいのが見えてくる。やがて雲にさえぎられる。機体はぐんぐん下降して雲海につき入り、更につき破つて下へ出る。俄然、ドイツの森と赤い屋根と赤い煉瓦の美しいコントラストの景観が展開してくる。忘れられぬ印象である、ドイツへ来たその最初の実感！ 午前6時45分！（日本時間と5時間の時差 全く予定通りにエア・フランスは見事に着陸した。機内で知り合った新田氏が「先生、おめでとうございます。ドイツにつきましたね」と言つて祝福してくれた。この人はパリへ更にのりつづけた。天皇誕生日にドイツへついたのである。

飛行場にはパウルス夫人が次男フォルカー君と一人娘のレナーテ嬢を伴れて迎えに来てくれた。直ちに自家用車でパウルス家まで直行してくれた。安藤君にスライドで見せてもらった通りの環境。自分の室に案内されて、思ったより広くきれいなのでうれしく思った。机の前の庭は芝生、そこに2本のリングゴの樹が今正に満開、小鳥はさええずり、まるでおとぎの国へでもたどりついた感じであつた。ロッテ夫人、ティム君、フォルカー君、レナーテ嬢、リュデイガー君という一家であるが、朝食を共にした。午前は夫人と駅の近所へ。郵便局でハガキを買う。午後は次男と5月の定期を買う。20マルクである。ウェリングスビュッテルから大学のゼミナールのあるダムトールアまでの定期。



○1961年4月30日（日）

北方に向かってシュタイン夫人（パウルス夫人の母）、パウルス夫人、ティム君、フォルカー君（運転）とドライブ。小犬E、親戚の獣医ルツペルツ氏のところで注射をもらおう目的でドイツの田舎の風景を満喫。いわゆるハイデ（エーリカの生ずる曠原）もみな日本と同じようになわらぶきの家もあった。勿論、すべてレンガづくりである。それでなければ寒気に耐えられない。獣医の奥さんは一生懸命で畠をたがやしていた。素朴な光景である。家の中に入ってみると家具は日本の中流くらいである。バターやチーズがよくしみているおいしいクッキーである。ついた翌日にこんなドライブを味わうとは思わなかった。

